

平成
26年度

八雲をよむ

感想文・作詞・詩
入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、現在の「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とする様々な事業を行っています。

この一環として、昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ 感想文、作詞・詩募集」も今年で二十九回目となりました。今回も、感想文三十七点、作詞・詩十一点、合計四十八点の力作をお寄せいただきました。

この作品集では、応募作品のうち優秀賞及び優良賞を受賞した十点の作品を掲載しています。ぜひ多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

最後になりますが、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

平成二十七年三月

主催 松江市

松江市教育委員会
八雲会

後援 毎日新聞松江支局
BSS山陰放送

目次

第29回 感想文 入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲に学んだこと

松江市立掛屋小学校 六年 三島 杏夏……………1

〈優良賞〉

松江はんの能と小豆とき橋

松江市立八雲小学校 四年 石倉 要……………2

★中学生の部

〈優秀賞〉

『小泉八雲集』を読んで

学習院女子中等科(東京都) 二年 池野 薫……………3

〈優良賞〉

小泉八雲「鳥取の布団の話」

安来市立広瀬中学校 二年 藤原 沙耶……………4

★高校生の部

〈優秀賞〉

「怪談」を読んで

兵庫県立加古川東高等学校 一年 澤田 幸輝……………6

〈優良賞〉

小泉八雲が感じた日本

兵庫県立加古川東高等学校 一年 山本 瑛介……………8

〈優良賞〉

雪おんなの儂い恋

静岡英和女学院高等学校 二年 長谷川 万桜……………9

★一般の部

〈優秀賞〉

クロスロードで小泉八雲を想う

広島県広島市 柴田 篤……………11

〈優良賞〉

「漂流」

東京都昭島市 三浦 律子……………13

第29回 作詞・詩 入賞者

〈優良賞〉

だんだん

鳥取県米子市 矢畑 哲也……………15

講評……………17

感
想
文

小学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲に学んだこと

松江市立揖屋小学校六年 三 島 杏 夏

私が尊敬し、目標としている人物、それは小泉八雲です。理由は、八雲が一人で外国に行き働いていたということやジャーナリストになった時のように八雲はとても努力をする人だということを知ってあこがれるようになったからです。私もし、外国で働くとしても一人では行けないし、ましてやその働いていた先の国の歴史に名を刻むことなど無理だと思います。けれど、八雲のように努力をしたら……！ と思えば八雲を私の目標にしていろいろなことに挑戦し、頑張っています。

八雲が努力していたのはジャーナリストになる時だけではなく、怪談を書いていた時でもでした。その、八雲が書いた怪談の中で私が入っているのは『子育てあめ』です。理由は、戦争（広島に原爆を落とされたあとのこと）の物語を読んで八雲と同じ気持ちになったからです。『目の見えない被爆してしまったお母さんが、自分の赤ちゃんの名前を呼んで生きているか何回も確かめ必死に赤

ちゃんを守っていた。そして、赤ちゃんを救助隊員の人にわたしてそのお母さんは亡くなった。』そういう内容の物語です。私はこの物語を読んで、八雲が『子育てあめ』の最後に書いていたように母の愛は死よりも強いと思いました。この怪談を読んだのをきっかけに、八雲が書いた怪談はただ恐いだけでなく、不思議だと思うところがあったり、女性の優しさと恐さが描かれていたりするなどと、読んだ人を考えさせるようなことが書いてあると思いました。

そんな怪談を書く八雲のことを知り、私が変わったことは、松江について興味を持つようになり以前よりも松江のことが好きになったことです。私は、八雲のことを知るまで、松江のまち歩きなんかほとんど興味がありませんでした。でも、怪談に出てきた場所に行ってみたり、八雲が住んでいた場所に行ってみたりすると自然に「また、松江を歩きたいな。」とか「昔は松江はどんな感じだったのかな。」と思うようになりました。そうして、松江に興味を持つようになり松江が好きになりました。

私は、今、八雲に会いたいのです。会って、お礼を言いたいです。理由は、私に努力の大切さを教えてくれたし、松江に興味を持たせてくれたし、何よりも日本人や日本の文化のすばらしさ・いいところを世界に紹介してくれたからです。でも、もう会うことはできません。なので、ここで字でお礼の気持ちを伝えたいと思います。「ありがとう。だんだん。」

〈優良賞〉

松江はんの能と小豆とぎ橋

松江市立八雲小学校四年 石 倉 要

ぼくは、えんげき「日本の面かげ」を島根県民会館でみました。

ぼくは、八雲のおくさんのセツがきも太でおどろいてしまいました。さらにおどろいたのは、八雲がセツの家族を松江からくま本、神戸へといっしょに連れて行き、なかよくくらしただけでした。

ぼくは、げきをみた後、八雲の話がまた読みたくなって「へるん先生こんにちは」を読みました。ぼくは、去年から能楽のうたいや仕まい、能管を習っているので、能楽「かきつばた」が出る「小豆とぎ橋」が強く印象に残りました。この話は、小豆とぎ橋で「かきつばた」をうたうとわざわざいがかかるといいうい伝えを無ししたさむらいの話です。橋では何も起こらなかったけれど、家では息子の首がもぎ取られていました。八雲の話の中で一番こわく、血が流れる話です。

ぼくは、島根大学の小林先生に松江はんの能楽について教えてもらいました。先生によると直政から最後のはん主定安まで、松江じょうや有力な家来の屋しきで能楽がさかんにえんじられたそうです。時には、しんじ湖に船をうかべて能をえんじたことやあの「かきつばた」がえんじられたこともあったそうです。ぼくは、橋でう

たったさむらいは、ぶじゅつだけじゃなく「かきつばた」を暗しゅうし、節まわしができる学問を身につけた上級ぶ士だったと思います。ぼくは、「老松」や「大社」を練習して三か月になります。ビデオを何回もみて大きな声でうたえるようになりました。きつとこのさむらいは、との様の前でも「かきつばた」をえんじることができるといふ大きな声で、正ぎでおせん子をかまえて堂々と橋でうたったと思います。今の時代と同じで、夜の大声は苦しうが出るほどうるさく気味悪く聞こえたと思います。

能楽では、うたいや仕まい、おはや子でせいや神様、ほうれいをぶ台によび出します。「かきつばた」もかきつばたのせいが、百人一首で有名なあり原のなり平の思い出をあい知の八橋で語る能です。上級ぶ士だったセツの家でも能がえんじられたり、練習することも多かったりしたのでないかと想うことができます。そして、夜、外でせいやほうれいをよび出すうたいの大きな声を出すことをやめさせるために、とてもこわい話を言い伝えてきたのだと思います。

八雲は、ぶ士のためしいを大切にせるセツやセツの家族を大切にしながら、江戸時代から続く松江はんの文化を守ろうと決心したと思います。ぼくも、室町時代に始まり、江戸、明治、大正、昭和、平成の長い歴史をくぐりぬけた能楽について学ぶことで、松江で大切にされてきた文化を守り、新しい時代につなげていきたいと思えます。能楽は、八雲とぼくをつなぐタイムマシンになりました。

〈優秀賞〉

『小泉八雲集』を読んで

学習院女子中等科（東京都）二年 池野 薫

小さい頃、私は「耳なし芳一」の話聞いて泣いてしまったことがあります。耳をもぎ取られても声を出せないことに恐怖を感じたからです。そして芳一はなんて強いのだろうかとも思った覚えがあります。小泉八雲はこういう怪談ばかりを書いていると思っていました。しかし、今回このコンクールに応募するために小泉八雲の本を読んでみようかと丁度、家にあった「小泉八雲集」という本を読んでみて、違うということを知りました。日本の文化についての話も書いていて、この作品集は小泉八雲が海外の人のために書いたたくさん本のなかから代表的な作品を集めて、また日本語に翻訳した本でありました。この作品集を読んで一番最初に気付いたことがあります。それは、怪談・奇談などの物語の最後に小泉八雲が感じた疑問を書いていることです。その疑問について友人に説明してもらったりしてあったりします。そんな中でも、小泉八雲自身がその話の背景を知りたいと、墓地に実際に行った話があります（「悪因縁」）。

結果、この話に出てくる人物の墓はなく、途中で道を教えてくれた女性に怒る小泉八雲に、同行した友人が「あなたはこの話を実際に起こったことだと思っているのですか。」と言われてしまいます。

結果はともかく、このことから小泉八雲はとても探究心が強かったことが伺い知れます。今、私の中の小泉八雲のイメージとして、話を語る人にたくさん質問をしている様子が思い浮かびます。本を読む前の少し暗い印象は私からはもうなくなりました。そして、本にある疑問は、読者にも同じような疑問を持つてほしい、と思ったからではないかと考えました。ここまで日本のことを探究しようとする人は当時珍しかっただろうし、海外（主に西欧）に日本のことを発信した人は、小泉八雲以外にいたのでしょうか。民話や古い言い伝えなどは、学校がない時代の教科書であったと聞いたことがあります。そんな話の数々を、昔の外国の人たちが楽しんで読んでいたのならないなと思いました。

ところで、私がこの作品集の中で最も良い話だなと思う物語があります。その話は「漂流」です。好きな理由は幾つかあります。一つに、この話は主人公が助かるためです。私はハッピーエンドが好きだからです。二つ目に、読んだ後に何故かほっとした気分になるからです。しかし、これは主人公が助かるからという一つ目の理由に起因しているものではないかと思っています。もしかすると、同じことなのかもしれませんが、途中、死んだ仲間たちが主人公の甚助

に、「こっちへ来い！」と呼んだときに甚助を道連れにするために呼んでいるものだと思いますが、本当は眠ってしまった甚助を助けるためだったのです。普通はここで一人だけ死んでいないことへの妬み、とか寂しいからなどの理由で、生きている仲間を呼んでしまうと勝手に思い込んでしまっていました。しかし、助けるために仲間を呼んだのです。甚助はなんと良い仲間を持ったのであるうかとしばしの間、ジーンと感動しました。また、仲間のみならず船で助けてくれた船長たち、九鬼の領主、などの焼津に帰るまで助けてくれる人たちの優しさはとても温かく、故にほっとした気分になったのだと思います。そして、本の解説を読んだところ、この天野甚助さんという方は実在されるそうです。つまりこの話は実話であるのです。これにはとても驚きました。「渡る世間に鬼はなし」をそのまま表したような話であると思いました。

そして、もう一つ、「日本人の微笑」を読んで思ったことを書きたいと思います。微笑をしていることを日本人は言われて気付くものだと思います。これは小泉八雲が日本人を客観的にみられる外国人だったから気付けたことだと思います。しかし、本当の微笑の意味を他の外国人が理解することは難しいだろうと言いつつ彼はそれを読み解くことができるのです。つまり、小泉八雲は外国人でありながらも日本人に近い存在だったのでしょうか。

最後に、この作品集を読んで初めて知ったこと、それで驚いたこ

とがたくさんありました。なによりこのような機会があったことを心から感謝したいと思います。ぜひ、「心」や「知られぬ日本の面影」など他の作品集を読みたいと思いました。

〈優良賞〉

小泉八雲「鳥取の布団の話」

安来市立広瀬中学校二年 藤原沙耶

私はこの話を読んでなんだか温かい気持ちになりました。

この話はある宿の布団から

「あにさん、寒かろう」

「おまえ、寒かろう」

と幼い子どもの声がすることから始まります。一人で寝ているときに子どもの声が聞こえてきたら不気味です。でも、この子どもはお互いを心配しているかのような言葉を発しているので何か理由があるのではないかと思いました。

その布団の持ち主は貧しい家族でした。ある冬の日、父親と母親が病で亡くなりました。残された幼い兄弟は食べ物を得るために両親の着物、自分たちの物を売っていきます。そして最後に残ったものが布団だったのです。単純に二人の兄弟のことをすごいと思いま

した。幼い年で両親が亡くなることのショックや悲しみ、苦しさというものは私には分かりません。だけど絶対大きいものだということには分かります。頼れる人もいない。二人のその時の気持ちは「孤独」に近いものではないかと思えます。私の周りにはたくさんの方がいます。だから私は孤独ではないと思えます。でも私は時々孤独な気持ちになることがあります。私は人見知りなので自分から話しかける勇氣はないです。周りに人はいるけど、そのなかに仲の良い友達がいなくて、孤独だなと思えます。「友達」っていうのも親しい人、信頼できる人っていうのはほんの一部です。だから私も孤独を感じることは多いです。でも、この兄弟は毎日が孤独。しかも幼いです。そんな二人が協力して毎日を過ごしているのは驚きです。すごい精神力だなと尊敬します。

その兄弟はとうとう家賃を払うことができなくなります。大家は家賃が払えないことが分かったと布団を取り上げ、二人を雪の中へと追いだしました。お金もない、行く先もない二人は家の裏側に身を潜めるもの、お互いしつかり寄り添って深い眠りに落ちていきました。

私为大家だったらどうするのだろうか。やっぱり家賃を払えない人には出て行ってもらうしかないのかなと思えます。でも、この家族の状況を知ったら私は二人の力になりたいと思えます。二人も頑張ってるし、幼い年で追いだすのはあまりにもかわいそうです。で

も結局、世の中はお金なんだとつくづく思います。そういう世界は、お金持ちが得みたいで嫌です。みんなが平等で幸せな世界になることを願っています。そして、最期まで寄り添って寒さにたえていた二人からは兄弟愛を感じました。自分がよければいいのではなく、周りの人を思いやる優しさが伝わってきます。私はつらい時や追いこまれた時に自分がよければいいと思ってしまう。自分に余裕がなくなるとつい、自己中心的になります。二人は、寒さにたえ、いつ死ぬかも分からないギリギリの状況でもお互いを思いやっていました。すごい感動しました。両親が亡くなり頼る人がいなかったという経験をしたからなおさらなのかもしれません。

ある日、二人を見つけた人が千手観音堂の境内に寝床を作っていました。この話を聞いた宿の主人は、布団を寺に寄進して魂が成仏するようにお経をあげてもらいました。それから、その布団から声ができることはありませんでした。

「よかったね。」

そう言ってあげたいです。ちゃんと寝床ができて本当によかったです。布団から声がしなくなったということはちゃんと二人の魂が成仏できた証だと思います。

この話を読んでいろいろな気持ちになりました。布団から声がした時は不気味だし怖かったです。でも、その訳はすごく悲しいものでした。幼い兄弟が両親を亡くし、家賃を払えなくなり、最後に

残った布団も取られ追いだされるといふものです。その時は「孤独」について考えました。孤独な二人の生き方には尊敬し、今までの自分の生き方を振りかえることができませんでした。最終的に二人も亡くなるけどちゃんと寝床が与えられ、最後は温かい気持ちになりました。私が一番思ったのは、「どんな状況でも周りを思いやれる人間になれ」ということです。つらくても、苦しくても、自分だけではなく、相手を思いやれる優しさがもてるようになりたいです。

〈優秀賞〉 高校生の部

〈優秀賞〉

「怪談」を読んで

兵庫県立加古川東高等学校一年 澤 田 幸 輝

「怪談」という言葉を聞いて、自分は「妖怪」という言葉が頭に浮かんだ。江戸時代の怪談話は、妖怪や幽霊といった話が中心であったと、自分は認識していたからである。しかし、この話の中心は、「転生」という自分がイメージしていた物とは、少し異なっていた。この本を読んで、自分の思った事、考えた事を書く。

この本の大半は、それまでに書かれた日本の文書を参考にして書

かれている。もちろんそういった文書の中にも、「妖怪」の話はたくさん出てくるが、作者小泉八雲は、それらをほとんど選択せず、「転生」の事を中心に書いている。キリスト教では、「転生」はないと説いている。西洋人である作者にとって、仏教的な「転生」という思想やそれについて数多くの作品が残っている点に、興味をそそられたのだろう。

また、「人の死」についても作者が深く考えている事が文章から読み取れる。作者は、人が死ぬ瞬間を「こときれた」とだけ表記している事はない。必ず死ぬ直前の言葉と、死の直後の静けさを表現している。この静けさの中に、作者は読者に時間的な「間」を与えている。作者は、「人の命、死についても一度見つめ直してほしい」という事を読者に投げかけているのだと思う。それと同時に、作者自身も「生きている不思議」「死んでいく不思議」について、改めて見つめ直したのではないだろうか。いずれやって来る「死」に対して、恐れを持つのではなく、受け入れる事の大切さも自分達に投げかけているのだろう。「転生」という思想は、現代の自分達から見ればありえない事だろう。なぜなら、今、生きている事は当たり前で、「不思議さ」など考えないからである。しかし、作者は「人の死」を見直す事で、その思想は十分に考えられる事が出来ると表現している。「当たり前」と思っていた事がらを視点を変えて別の角度から見直す事の大切さを改めて学んだ。

作者は、「転生」だけでなく、日本人の「人情」についてもこの作品では多く触れている。日本人の人情とは、流行語大賞にもなった「おもてなし」の心である。作者は、この日本人の心を見て非常に驚いたのだろう。「貉」の話に、男が、泣いている女をひどく心配して、何度も声をかける場面がある。我々、日本人から見ると特に違和感を感じないが、作者はしつこすぎると思ったのだろうか、少しうざったく書いている。外国人にとって、日本のもてなしは少しうざったいかもしれない。作者が、友人に宛てた手紙には、「ひとつずつ、何でもしてくれる日本の習慣が嫌いだ」と、書いている。作者は、「人を怠惰にするから嫌いだ」と、述べているがそれだけではないはずだ。日本人に比べて、積極的に自己主張をする西洋人にとって、日本のもてなしは「人形」扱いされているという考えになるのも無理はない。しかし、作者は最後に「人の感情を害しては面白くないから昔の習慣に大人しく従っている」と、書いている。前文でも書いたが、我々にとって、このもてなしは当たり前だが、外国では当たり前ではない。作者も同じ感覚で日本に来たのだろう。作者にとっての「当たり前」は、日本では「当たり前」ではない。その驚きが、日本の事を調べたいという思いに繋がりが、日本人の「当たり前」意識を変えさせたいという原動力になったのだと自分は思う。

「怪談」の中でも、一番有名な「耳なし芳一の話」について思っ

た事を書く。自分は、この話を読んで、御伽話の「浦島太郎」を連想させられた。大きな屋敷に連れて行かれ、最後には耳がなくなった。日本文化を学んだ作者なので、実話と浦島太郎の話を組み合わせたのではないかと思う。最後の段落で、芳一が裕福になったと書かれているが、芳一の気持ちや、表現については一切書かれていない。ここに自分は、作者の世界観が表われていると思う。日本中から自分（芳一）の演奏を聴きに來てくれる事は、芳一にとって嬉しかった事だと自分は思う。しかし、目が見えず、耳も聞こえなくなった芳一は完全に孤独である。この孤独から少しでも抜け出すにはどうすれば良いか、そういった柔軟な考えを若い我々に求めたのではないかと自分は思う。

小泉八雲の話を読みながら、自分はちあきなおみの曲を聴いている気持ちになった。一定の歌い方の中に奥の深い、聴いている側に関心させられる彼女の歌い方に、彼の作品はそっくりだと思った。外国人であるという価値観を捨て、単調な言葉遣いしながら、自分自身の日本人への思いを入れ込んでいったからこそ、一世紀以上経った今でも、名作として読み継がれているのだと自分は思った。

〈優良賞〉

小泉八雲が感じた日本

兵庫県立加古川東高等学校一年 山本 瑛 介

今年の夏、僕は、『小泉八雲集』という本を読んでみた。英語の教科書に小泉八雲のことがほんの少し書かれており、それで、どんな人物なのか、どんな作品を書いたのか、と興味がわいてきたからだ。そこで、まずこの本を読むにあたって、小泉八雲についていろいろ調べてみた。

調べてみて、小泉八雲はギリシャ生まれで、一八九〇年に来日したということがわかった。八雲が尊敬していた女性ジャーナリストの発言に激しく心を動かされたかららしい。このことがきっかけで、八雲は日本での文筆活動を精力的に行ったのではないかと考えた。

今回僕がこの本を読んでいて、特に注目した文章がある。それは、『日本人の微笑』という文章だ。この話は、日本人の微笑みという観点から、日本人とイギリス人を比較し、さらに日本人の微笑みの理由や道徳観などについて説明するものだ。僕は、この文を読むまで、この文に書いてあるような微笑や礼節について、深く考えたことはなかった。しかし、小泉八雲は、外国人であるにも関わらず、日本人が作り出す微笑みについて深く考え、理解しようとして

いた。僕は、自分が他人への礼儀のために微笑んでいるのか、わからない。ひよっとすると、礼儀のための微笑みを作っていたのか、かつて小泉八雲が生きていた時代の日本人までだったのかもしれないし、自分が気づいていないだけで、僕の周りは、そういった微笑みであふれているのかもしれない。しかし、どうであったとしても、僕は、小泉八雲のことを素直にすごいと感じた。彼は外国人ではなく、実は日本人だったのではないかとさえ感じた。それほどまでに、彼は、日本人の心をよく見ていたのだと思う。

僕は、父から、小泉八雲は怪談の話で有名だと聞いていた。しかし、実際に読んでみて、彼の作品には、他の怪談話のような怖さや不思議さだけではなく、当時の人々の人間らしさのようなものもあったように感じた。どの話のどの登場人物にも、妖怪にさえも、親近感を抱くことができたし、それらの登場人物の心情や行動の理由も何となく理解できる気がしたし、登場人物がまるで実在するかのように脳裏に浮かんできて、それらが実際に命を持っているようにさえ感じた。彼の作品は、僕の心に深く入り込んでいった。僕は、彼の作品がとても好きになった。

この本で、好きになった話がいくつかある。そのうちの 하나가、『和解』という話で、若い侍がかつて離縁した妻と再会するが、その妻は既に死んでいた、という話である。侍と妻が語り合ってから、侍が目を覚ますと、妻の骨が残っていて、侍が後に真実を

知る、という結末に、僕は衝撃を受けた。まさかこんな結末になっていたとは、思いもしなかったからである。少し背筋が冷たくなったが、夫の心情の変化をはっきり感じる事ができたので、僕はこの話に興味を持った。

『守られた約束』という話も好きだ。赤穴宗衛門と丈部左門が九月九日に再会するという約束をし、城に閉じ込められた赤穴が約束を果たすために自害するという話だった。自害してでも約束を果たした赤穴の覚悟と、その赤穴を信じて待ち続けた丈部の姿に、思わず感動してしまった。これらの行動に、二人の武士としての誇りを感じた。

彼の作品はとても読みやすく、ページをめくる手が止まらなかった。彼の作品から、彼の日本への愛を感じた。それに、彼のことをいろいろ調べ、彼がどれだけ波乱万丈な人生を送ってきたかということも知った。僕は、小泉八雲は尊敬すべき人物なのだ、と心から感じた。

つい先日、僕は家族と一緒に京都に行き、伏見稲荷大社など様々な神社や寺を訪れた。そこにあった神社や寺のどれも、神聖さや趣深いものを感じた。小泉八雲は、こんな姿の日本を見ていたのか、としみじみ思った。

最近世の中はさまざまな研究・開発・生産を行い、常に新しいものを追い求めている。それは、良いことだと思う。しかし、時には

過去を振り返ることも大事だと思う。そうして、小泉八雲が見ていた頃の日本人の文化や考え方を、何かに生かすことができたいと思う。

僕は、この本を読んで、彼が訪れた場所や彼の作品の舞台となった場所を、機会があれば訪れたいと思う。そうして、小泉八雲という人物の生き様や、日本の姿について、じっくり考えたいと思う。

〈優良賞〉

雪おんなの儂い恋

静岡英和女学院高等学校二年 長谷川 万 桜

小泉八雲さんは私の住んでいる焼津の海が気に入りで、長期休暇中に何度か家族と来られたそうです。「小泉八雲が愛した焼津」ということで焼津には小泉八雲記念館というものがあ、そこでは小泉八雲さんの焼津での足跡や小泉八雲記念館の収蔵品について様々な事が学べます。

ところで、小泉八雲さんといえば怪談話が有名です。しかし私は怖い話はあまり好きではありません。私がまだ幼かった頃に読んだ耳なし芳一の話は、怖くて痛々しくて、どうして小泉八雲さんはこの話を書こうと思ったのだろうかと思議に思いました。その頃の

私は、母が言っていた「怖いけれど、読んだ後に優しい気持ちや温かい気持ちになれる。」というのがよく分かりませんでした。

高校生になった今、再び小泉八雲さんの怪談でも有名な「雪おんな」を読んでみることにしました。しかし読んでいくうちに、いくつか疑問に思う事が出てきました。どうして一緒に小屋にいた茂作と巳之吉のうち茂作には白い息を吹きかけて凍死させるのに、巳之吉は生かしたのだろうか。何故自分の存在を誰かに教えたなら殺すと言ったにも関わらず、巳之吉が話をして殺さなかったのだろうか。そして何故小泉八雲さんは題名の「雪おんな」の「おんな」を漢字にしなかったのだろうか。

それらをもし私が雪おんなだったらという目線で考えてみました。霊はまだこの世に心残りがあると上手く成仏されない、というのをよく聞きます。この雪おんなの場合、心残りは恋だったのではないかと思います。そこに茂作と巳之吉がやって来て、きっと雪おんなは巳之吉に恋をしてしまったのではないのでしょうか。そして数年後、若く綺麗な女の姿になり、巳之吉に近づき結婚したのだと思います。一目惚れの相手が忘れられずにもう一度会いに来るなんてロマンチックだし、なんだか雪おんなが可愛らしい乙女に見えてきました。そして巳之吉は、昔にあった奇妙な女の話結婚した雪おんなに話してしまいます。すると途端に雪おんなは若く綺麗な女の姿から恐ろしい雪おんなの姿になり、巳之吉を殺そうとします。しかし、

二人の間にできた子供達の事を思い、雪おんなは巳之吉を殺さずに自分の姿を消し、もう二度と現れなかったそうです。何故雪おんなは巳之吉を殺さなかったのでしょうか。それはきっと好きになってしまった相手を本当に大切に想っているから、自分との約束を破った巳之吉だけ本当に好きだったから殺せなかったのだと思います。もしかしたら巳之吉も雪おんなの事を信用して綺麗な雪おんなに奇妙な女の話をしたのかもしれない。もし自分が雪おんなだったら嬉しいのではないかと思いましたし、心残りだった恋もして、雪おんなは成仏して消えていったのだと思います。

しかし、恋の季節といえは出会いの多い春や気候の暖かい夏のイメージがあります。何故寒い冬にしたのか、考えてみました。それは雪はすぐに溶けてしまう事から、儚く叶わない恋を表現したかったからだと思います。

色々考えてみると、始めは怖かった雪おんなの物語が切なく美しい物語に思えてきました。

最後に「雪おんな」の「おんな」を何故漢字にしないのかを考えてみました。私の家はお正月に出す年賀状を全て手書きで出しています。いつも書は祖母に教えてもらっています。その時、男の人に出す時には「様」を使い、女の人に出す時には「さま」を使うように教えられました。なぜなら漢字より平仮名の方が優しく柔らかいイメージになるからだそうです。確かに「雪おんな」も「雪女」と

書くこと心まで冷たいただの妖怪といったイメージですが、「雪おんな」と書くこと女性らしい、どこか優しい感じに見える気がします。きつと小泉八雲さんもお話を書く時に登場人物の雪おんなをただの妖怪というイメージではなく、女性らしい普通に生きている私達のような人間らしい一面を思い「おんな」と平仮名で表記したのかと思いました。

一見怖く恐ろしく思える怪談話ですが、妖怪や霊などの思いを考えてみるとまた違った見方ができて楽しいなと思いました。そして私が幼かった頃に私の母が言っていた「怖いけれど、読んだ後に優しい気持ちや温かい気持ちになれる。」というのが分かった気がします。もつと小泉八雲さんの怪談話を読んでみたいと思いました。

一般の部

〈優秀賞〉

クロスロードで小泉八雲を想う

広島県広島市 柴田 篤

青いカードにはYES、赤いカードにはNOと書かれてあり、この二枚の札を持った人達が私を含め七人でテーブルを囲み、そん

な卓が広い会場にたくさん並んでいる。やがて問題が読み上げられる。「あなたは市民。地震の大きな揺れが収まり自宅は半壊。家族にケガはなく、三日分の食糧を入れた非常袋を担いで避難所に来た。避難所には非常袋を持たない人も大勢居る。あなたはそこで、自分の非常袋を開けますか。」黙考し、どちらかのカードを裏にして前に出す。「オープン」の合図で一斉にカードをめくる。自分と同じカードが過半数なら、青いミニ座布団がもらえる。その後一人ずつ、なぜこの札を選んだのかを説明する。これを繰り返して、集めた座布団の多い人が勝ち。但しメンバーの中で自分一人だけが他の人と違った場合には、一人だけ「金の座布団」を得る。この防災ゲーム「クロスロード（岐路、分かれ道）」は、一九九五年一月に発生した阪神・淡路大震災の教訓から生まれた。その大震災から二十年目を控えた、師走のある日。神戸ポートアイランドで開催された「千人のクロスロード2014」に、私は参加していた。同じテーブルを囲んでいるのは大震災を経験した地元の主婦の方々、消防士さんなど多彩。先の質問に私はYES。「非常袋を開けて、持っていない人に分けてあげる。」他の人は、「分けると言っても、知り合いばかりの避難所で、あの人にあげてこの人にあげない、というのには現実無理。だから開けない」「日頃から三日分の備えを、と言われていたのに用意していない人に、気兼ねする必要は無い。開けて食べる」「自分の食料をしっかりと食べて、復旧や救助に向か

う」など判断は人それぞれ、実に多様だ。あちら立てればこちらが立たず、という難儀な意思決定を迫られるこのゲームには「正解」というものが無い。

この日はテレビ局や新聞社の記者が多数、取材に来ていた。熱気とざわめきと、次々に押し寄せるジレンマにいつしか脳が痺れ、意識が遠のく。カードを見つめる視野の片隅が朧おぼろになり、そこにいつの間にか座っている小柄な白人が、神戸クロニクル社のラフカディオ・ハーンと名乗って、年が明けたら小泉八雲と名前を変え日本に帰化するつもりだと、自己紹介した。質問が読み上げられる。「あなたは江戸時代の海辺の村の長者。台地の屋敷から見下ろすと、村人たちが豊作を祝う祭りの準備をしている。地震の揺れが続いた後、海水が沖に引いたので津波を予感する。村人に叫んでも声が届かない。近くには収穫したばかりの稲の山がある。大切な年貢米だ。あなたはこの稲むらに火を付けて、村人を高台に誘いますか。」私はNOのカードを用意する。全財産を燃やし、領主から打ち首にされるような不合理な行動はできない。それに、村を呑み込むような大津波がくるはずはない。皆それぞれのカードを出す。「オープン！」全員NO？ いや、YESの札が一枚だけ。金の座布団を手にしたのは、ハーンだった。

ハーンが「生神様いきがみさま」として描いた長者にはモデルがいて、別のやり方で住民を救ったといういきさつは、菅原伸氏が好著「へるん先

生の汽車旅行」で紹介されている。救われた村人から「大明神として奉りたい」という申し出があったのを辞退するような、合理主義に徹した人であつたらしい。それをハーンは、生きながら神として祀られた、と語っている。長者は祀られることを拒まず、「心ゆるやかな質素な生活を送った」と。

あの分厚い「21世紀の資本」を著したトマ・ピケティ氏が、フランス最高の栄誉であるレジオンドヌール勲章を辞退したという話題は記憶に新しい。二百年以上に亘るデータを分析し、資本主義下での富の集中による不均衡に警鐘を鳴らした学者は、勲章を拒んだ。過去サルトルも、この勲章を辞退している。ノーベル文学賞をも辞退したサルトルは「いかなる人間でも生きながら人格化されるには値しない」と、言い放つ。サルトルもピケティも、其々に合理的な理由で栄誉を拒んだのだろう。富裕税の強化を支持する経済学者に勲章は似合わないし、無神論的実存主義の哲学者に生神様などあり得ない。方や自分の富を一瞬にして灰にする決断を下す人間が、神として祀られることを受け容れる話をハーンは作った。日本人の心に宿る「御霊みたま」を媒介させて。「西洋流の靈魂」がどのようなのか、またハーンの手紙が明治時代の西洋の人々にどのように届いたのかは知らない。唯一絶対の神とか、経済合理性とかを盲信することの危うさを感じ取る、多様かつ繊細な感性の持ち主がハーンであり、彼の表象に出雲の国・松江が及ぼしたあれこれを想うばかり

だ。はるか昔に「国譲り」の選択を迫られて、青いYESカードを出した神。その神を祀る人々の末裔である自分を誇らしく感じ、暖かな幸せを抱きしめるひと時を、小泉八雲は、私にもたらしめてくれる。

〈優良賞〉

「漂流」

東京都昭島市 三浦律子

没後一〇年、小泉八雲の魂が再び日本に舞い降りたのだろうか。二〇一四年の夏に、小泉八雲の作品を沢山読み、秋まで探求は続いた。

二〇一四年十月四日、伯母と母と食事会をする予定だったが、近所の人が亡くなった。母は、お葬式に行くため、食事会は中止した。

その日、偶々、八雲会のホームページを開いた私は、新宿区で行なわれる、小泉八雲没後一〇年記念公演「漂流」を知る。

これも弔う人と小泉八雲の魂が導いてくれたのか。亡くなった人への追善回向と小泉八雲の心がわかりますようにと御本尊様に手を合わせ、新宿区四谷区民ホールへ向かった。

辺りは静けさに包まれ、蝶ネクタイをした男声合唱団の紳士達が立ち並び、小内将人の演出、「漂流」たにかずこの朗読が始まった。私は、鞆の中から、上田和夫訳「小泉八雲集」を取り出し、八十頁にある「漂流」を開き、語りに耳を傾けた。

天野甚介は語った。「私は、これよりもひどい海で、二日二晩、泳いだことがあります」当時、甚助は十九歳。八人の船乗りのうち、生き残ったのが甚助一人。万延元年の申年、焼津から讃岐に航した福寿丸は、紀州沖で台風に襲われた。福寿丸は転覆し、船乗り八人は漂流。甚助は、船板を一枚、放り出してから、海に飛び込み、うまいこと体を船板に乗せることができた。猛烈に風は吹き、真っ暗な夜、二、三フイット先しか見えない。あつという間に船は沈む。聞こえるのは、波と風と雨の音ばかり。

十九歳という若さで、荒海に溺れ、たったひとりもがき苦しむ甚助の身体と精神の疲労が、私の両肩に重くのしかかってきた。

甚助の前に、勘吉、巳之助、乙吉、松四郎の亡霊が現れる。四人は怒った顔つきで甚助のそばに立ち、「ここで、おりゃ、舵をとらなきゃなんねえ。だのに甚助、眠ってばかりいる！」と子供の巳之助が叱りつけるように、大声で叫んだ。

甚助に、勘吉、巳之助、乙吉、松四郎の魂が覆いかぶさり、四倍の力となって、甚助に生きる力を与えたのではなからうか。四人は亡霊としてではなく、手を差し伸べる菩薩となって現れたのではな

かろうか。

「甚よ！ 祈れ！」と四人の魂が叫び、生きなきやなんねえと、甚助は、小川の地蔵さまと金比羅さまに祈りを捧げた。

人は助けを求める時、必ず祈りが心の内から興こる。祈りの心から、希望が生まれる。甚助も同じく、祈りによって、弱い心を希望に変え、苦闘を乗り越えようとした。

甚助の一念は、周りの環境をも変えた。船板は沈むことなく甚助を支え、カツオノエボシに刺されて意識が回復し、大きな海鳥が何度も頭を叩き、目を覚まし、希望を失うことなく、何時間も山の方へ、水をかいていった。その時、大きな帆掛け船が見え、助かることができる。

信じることによって出来上がった強靱な心は、甚助を救った。

亡くなった七人の命は決して無駄ではない。甚助が漂流した体験を語り継ぐ時、七人の命は蘇り、人々に生きる勇気を与える。小泉八雲が随筆として書き残したおかげで、甚助と七人の命は、今でも読者の心の中で生き続けている。永遠に人々の心に光を当て続けるであろう。

天野甚助作「菩薩和讃」の男声合唱が、小泉八雲の終焉の場所である新宿に響き渡る。

たぐいなや あらいそなみによる八と
ひかりをさしてうかむぼさつ

「明日、いっしょにいらっしやれば、その船板をお見せいたしやしよう」と甚助の言葉で幕を閉じる時、甚助と七人の命が私の心の中に照らし出され、感動の涙がこぼれ落ちた。

作
詞
・
詩

〈優良賞〉

だんだん

鳥取県米子市 矢 畑 哲 也

だんだん だんだん

ヘルンさん だんだん

日本に来てごしなつて

松江を気にいってごしなつて

だんだん

ああから百十年

日本も世界も

がいにこと変わったけど

ヘルンさんの遺した

あばかんの作品は

今も日本人の心を虜にしちよう

あの頃の西洋人は

どこか日本人を

だらずにしとつたけど

ヘルンさんだけは違つとつた

着物を着て日本食を味わい

古の文化や風俗まで楽しみ

節さんを女房にし帰化までしなつた

松江におおなつたのは

ほんの二年足らずだつたけど

ほんにヘルンさんは

日本人以上に日本人だつたわ

こげして松江の町を歩いちようと

今にもヘルンさんに

会えーやな気がすうのは

どげな訳だあか

そうだけ松江には

ヘルンさんの面影が残つちようだな

こげなところは

世界中さがしたつて

どこにもああへんで

ヘルンさん

こうからも雲の上から

松江を見とってごし^{*}ない

そしてこうからも

松江を好きでおってごし^{*}ない

だんだん だんだん

ヘルンさん だんだん

方言注釈

※1 「だんだん」・ありがとう。

2 「がいに」・たくさん。いっぱい。

3 「あばかん」・非常に多いさま。

4 「だらず」・バカ。阿呆。

5 「こげして」・こうして。

6 「どげな」・どうですか等の問い掛け。

7 「こげなとこ」・こういう所。

8 「ごし^{*}ない」・くして下さい。

講評

《感想文》

◇小学生の部

今回出品された作品は、どれも怪談という作品のみならず、作者である小泉八雲に親しみを感じ、作品に浸り込んでの感想が表現されており、好感がもてた。また、怪談で表現された怖さのみならず、作品の奥に秘められた、作者小泉八雲が何を伝えようとしたのかを読み取るうとした作品が多く見られた。

特に優秀賞の作品は、「子育てあめ」の作品を読みながら、作者が伝えたかった、母の愛情は命より強いということを読み取り、そのことに関しての自分の考えをまとめていた。さらに、作品を読みながら、小泉八雲に対して尊敬の気持ちをもつようになり、その姿勢に学ぼうとする姿も伺えた。(講評者 井田 佳彦)

◇中学生の部

昨年に比べ、応募数は減ったが、それぞれ八雲の作品をしつかりと読み込み、面白さや魅力を存分に伝えているよい感想文が多く見られた。

優秀賞作品では、『漂流』において死んだ仲間たちが主人公を呼ぶ場面は、眠った仲間を助けるためであると筆者は述べている。作品の随所からのぞく八雲の人間愛が読者に伝わる心温まる感想文で

ある。

優良賞作品では、『鳥取のふとんの話』を読み進める中で、「兄弟愛」や「思いやり」ひいては八雲の「平和への願い」を感じ取った筆者の素直な感性が光っている。(講評者 湯浅 哲司)

◇高校生の部

四編のみの応募であったが、いずれも日本と西洋との文化の違いなどの問題意識をもって、丁寧に書かれていて読みごたえがあった。

優秀賞作品は、人の死の場面における「間」の描写を取り上げ、八雲は読者に「いずれやってくる死をどう受け止めるか」を問うているとする。さらに、日本の「おもてなし」の文化にまで敷衍^{ふええ}するなど、一貫して文化的視点から論じられた力作である。

本年は、優良賞作品を二編選んだ。「小泉八雲が感じた日本」では、『日本人の微笑』を通して、「雪おんなの儂い恋」では、仏教的な「成仏」という観点を通して感想文が書かれている。いずれも八雲作品の魅力が読者に伝わる佳作である。(講評者 湯浅 哲司)

◇一般の部

優秀賞の「クロスロードで小泉八雲を想う」は、独創的な発想で、書かれた名文である。「へるん先生の汽車旅行」芦原伸氏著という最新刊の著書なども紹介している。すばらしい構成で、とにかく名文である。

優良賞の「漂流」は、全体がうまくまとまり、神様に祈りを捧げる主人公の心情をていねいに表現している。東京に転居した八雲は避暑地の焼津が楽しみであった。「漂流」は焼津滞在中の八雲の代表的作品である。焼津の風土が生んだ作品とも言えるものであり、そのへんのところをうまくまとめている。

佳作の「哀しみの文学」は、八雲の作品の中から共通するものをピックアップして、八雲の心情に迫る名文であった。

(講評者 日野 雅之)

《作詞・詩》

「だんだん」は、出雲弁で「ヘルンさん」に語りかけた詩で、声に出して読むとつい笑みがこぼれそうになる。朴訥ぼくちやうだが、かえってそれが幸いしている。ただ、「ヘルンさん」の捉え方は一般的な範疇はんしゆを出るものではなく、作者ならではの視点があればなおさらよかった。

「耳が残る」は、題から「耳なし芳一」を連想させるが、関連は曖昧。それでいてある種の哀感を湛たえているのが魅力だ。ただ、「君」とは何かといったいくつかの疑問は昇華しやうわされない。

「伊藤則資のはなし」は、八雲の同名の怪談のあらすじを、美文調にそつなくまとめたものである。改行の仕方など、詩の作法に従っているように見えるが、はたしてこれを詩あるいは詞と呼べるかどうか。

(講評者 岩田 英作・山根 繁樹)

【審査員】

井田 佳彦 岩田 英作 岡村 昌彦
酒井 抱一 日野 雅之 山根 繁樹
湯浅 哲司 吉田 紀子
(五十音順)

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)
1891(明治24)年 小泉家蔵

平成26年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文 作詞・詩 入賞作品集**

平成27年3月

編集・発行 松 江 市
松江市教育委員会
八 雲 会

